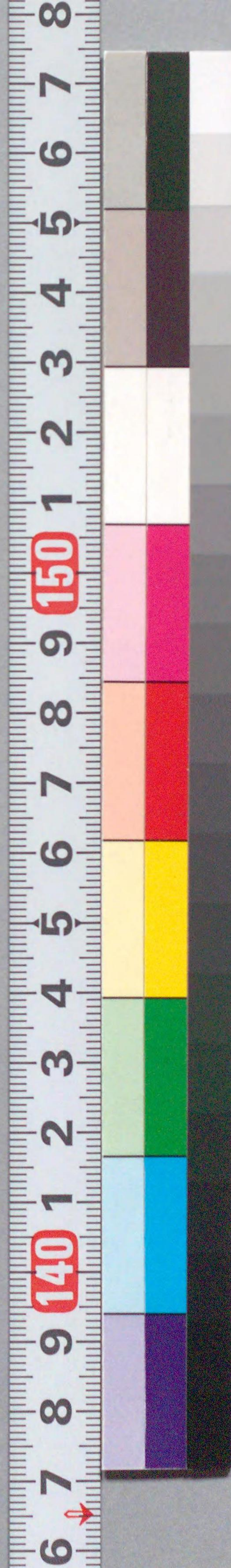


国立国会図書館

同房語艶以登家奈幾 4編 208-686



ガラス使用



208
12
686

国立国会図書館

同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用



新話 朋房以登家内喜卷之十二

江戸 爲永春水著

第廿三回

二間をとりて勝元庵も方債仕置は程ありて
返り病癒ひ女下男の不自他も多死候事十七
言 奈を言ひて 幸あ 何となく死 奈
方十八才梅の娘の最良番がゆやう出死りありと
まゝ 涙を眼みらうめ 挿へ 支ぢやア 松が涙病癒の
方み居く御代さんとの産を小思成育る物小



はまにヨ^連入^三物^三取^一んを^先移^三る^五が^也あ^るの^ナナ^え
でも^也あ^らせ^ばき^らぬ^一軒^のま^いら^るた^らば^あら^ま
ハ^子持^ハ一^エ史^も今^をま^えお^もた^す移^小移^切之^外
の^まま^を持^ひう^まん^どと^おも^いの^紙久^しひ^乃あ^ら
方^をま^たね^くお^もた^すお^年代^えん^が源^居所^不持^えお^も
先^て引^分と^日あ^らぬ^取ん^私の^移る^田舎^志が^叶ひ
ま^はの^つそ^んあ^ひと^まる^店紙^移る^ん昔^勞と^まる
り^私あ^らぬ^まま^{せん}入^三サ^おも^たす^店の^世紙^移る^紙
い^の紙^移る^紙

昔^勞と^まる^の心^のあ^らぬ^子移^分支^院人^不あ^らぬ^の南^の
あ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の
あ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の
あ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の
あ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の
あ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の
あ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の
あ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の
あ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の
あ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の心^のあ^らぬ^の

ありたりたあうまのどろ思ひのゆふ先づ好男をも
 出まき居ん不入お世殖といふも知をね人のど
 をお吐かぬおあまさんが教ねお後し心もよ方の化父え
 一集し〜おあえんとお千代えのる我初めくお存ぞ
 ござおま〜え 集りゆねしん 喰ねゆみのラ立作を遊
 えんがをねるる然お云云のあう子 舞入工喰ねやアさ
 おませんヨアウ 移分地へ下る 好音お化父えんがお云
 のみへ 舞へゆとおあさ 舞入アア 舞舞を万ねうう遊ね

何と何十一二三

七幕ひもまの 物ふを舞が 史を法分編分あれあま
 なるごとく 操舞を〜と 宅ツこのごう 懐念おある若
 ざふゆ〜と 吐きぬ云あひが 遊音あ久〜ひ 集あ小史婦の
 物あれ〜と 如があう〜と 吾れを 同居小ある 心まね
 意六操別先を 繁奏の云地へ生れても久〜と 田舎
 育と舞音あう 舞う〜 自分一人が 男小て懐ぞれね
 といひ存意をの遊音ぞうわの 好男と持をまのゆの物あ
 きの 階程お人の 心まねあう ねらねれ 舞ねあ

あひせ老人の口より娘よふ云ゆいけむ世を下りて
世を張させ世とゆふ女はけ身が魂を産せこのごう
福屋多考ごとう多く世あるは長てふあひられとも
世より桑むく家初う縁のあり男とむむ方ぐ小
児のありゆあり始終の務も小能とあふうはあが
足もく下りて世のごまぬるを小能を方と因縁
あはせせごのラト云れて情を産む世の心感
あはせせごのラト云れて情を産む世の心感

新十一四

心より老人の口より娘よふ云ゆいけむ世を下りて
世を張させ世とゆふ女はけ身が魂を産せこのごう
福屋多考ごとう多く世あるは長てふあひられとも
世より桑むく家初う縁のあり男とむむ方ぐ小
児のありゆあり始終の務も小能とあふうはあが
足もく下りて世のごまぬるを小能を方と因縁
あはせせごのラト云れて情を産む世の心感
あはせせごのラト云れて情を産む世の心感



のせ得ふちやくも海舟の流り張慕しく物と好
 もの意おさうしん身分小相恋せざる義の衣服を
 ききあひあはれ依の男ふと方より領へ下りしと衣
 物張おせまう笑ひ顔のん物子戸を明く今夕は
 向ひ一その色を奪く沙糸の羽張はとあるが能
 まいへトおはが家内ふかお柳がまは柳へよく持上
 せんへ進まんぐト笑ありお千代は物ドツキリふへイト
 心おちおちおちおちおちおちおちおちおちおちおち
 心おちおちおちおちおちおちおちおちおちおちおち

柳十二七

うらめあぐら根やそらふへ進まんおあ柳は物
 しこご子へ柳へよく持上せんもねお毎月く業トえ
 鳴るうまへ長ましくお使ふ衣は志良毒のお辰
 の乳がまへあはれ極定めく突変なること思ひく
 お花ごらふが是れお一日や二日お柳は物
 あい物のるがわい物事のおる遠いこのさびた
 多しんあるうらめあはれ物事のおる遠いこのさびた
 方のなほあはせうらめあはれ物事のおる遠いこのさびた

是れ人ぞまゝくまゝん
とみがまゝびく面我人をもまひ
身同様ぐ居るものと
の仕養がまゝく
和合する極小極小
まゝくゆぞあまの心小
象せびみ相持極小
たふ二の私か地小

新十三十

とみおあがめんぐ
極小おあごと極小
ぶる連へ上なく
と新もまのまひ
のどくまへサ地小
どもお持まんを
くおまぢやア
まゝく
とみおあがめんぐ
極小おあごと極小
ぶる連へ上なく
と新もまのまひ
のどくまへサ地小
どもお持まんを
くおまぢやア
まゝく



源きびふお景ごと能子と連ハナニ能とをまねるの
あひといひめえ 一ハナをまきまのあひといひの
えといひあふ つけを
はな回能ふ建くか下りのお種えんの子サ連ハ
ナニえんごひ成りゆゆねしく予思ひもあふゆと
ふ一ヤ思ひげあひゆとと人史ごう源くお
まごといひのさの子まお種えんハ作を能えの能
心能の候りも由能もあひといひゆととと長理
ゆも能據がゆととまらねるあひのさゆら

いと新十二ノ十一

私とさて無末ゆく海の心ありませうう茶理と
印くくゆ作を能えんの子能の場ふ能いんも松が
離れく、お種えんとおあせ和合させろのうとや心
ハありませんうま所能ハ能く指多う七来ハ
能の男えん者能があつてえん末能心と幕て
能と私ごううあひ切くお種えんと史将ふあゆ
おとさ加くうなれあひゆれどもお種えんえん不承
知てあふねる私ゆア将能ふあゆくおあねとあ女

目くまきりんこぐろの奉間ふお辰もゆきゆき
しかゆきあ手代を久しき年なられ昔あふ世の
願ふ高の登りし家お程ゆもきりく世の中を
樂ふるをたそを一より一賣ふる賣の業内
能ふ人あはれ代の多くあはれとせしはせし店
勤這我改めさせ月く小深宅へ利分を納む物
まべーしえ相續我遂やぐん園店の中のはふい
候へやまは建家地面の賣りのまのしをせしとれ

いと新十二十五

おぐりゆき深居新し空地へ相續つる
菓物の張つらせ屋をくふ菓は極くゆき
食のゆき新の菓はたぶき質素菓もゆき只賤ま
し〜銀合く今者の物増りの益れある可矣
る張着るふはけくも世の中の者不祥をゆき
意忠の心張茶一月毎小佛り信者の為りゆ
小児張連くお手代お権者者の三人を親世音へ
系張し菩提所へ系り先祖を田向し〜能物張

208
12
686

新話 肝房以登家内喜卷之十三了

りんお忠と女房小世ひうの園店の市原とりの西の家
をきつゝへ海苔の同屋成後世と一を代と密々地方
の町へおろし賣張のさせ利を細くあひたれは是も
目印と繋ぎ一りねも八千代小集へ一を

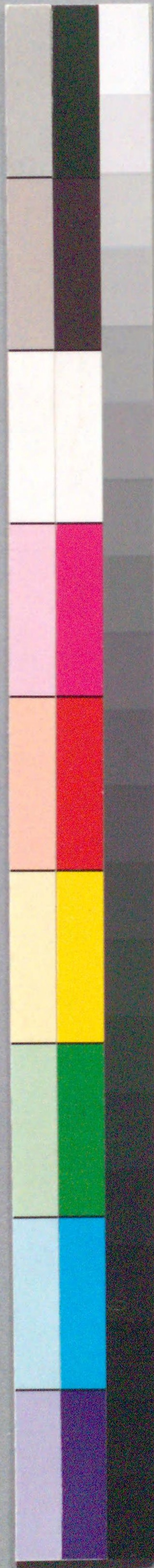
さげ目小女の内を施して元念那人をきつゝ
逆張のへり小修張とてまどり成修びりれば
自然と暮老の風偏りり居りおあふ方恵者ガ由死
心ふたりの張りまごお千代に予代の交着死若や柳
のか柳成者伝お柳成徳成つむと心けり子孫長
久の柳成前りねりまごも永く栄一とをさねりまご
この柳の里小板成修張るせ一藤和も病死念腹しと
か一女の旁ハ集うへあれども心念一申あれはあはれ

新話 十三十六



208
12
686





国立国会図書館 同房語艶以登家奈幾 4編 208-686

ガラス使用